

変わる学校

2023.11.3

民間会社に比べると、学校の働き方改革は進んでいないだろう。学校が、なかなか変わらない理由を考えてみる。

まず、教育界全体として、まだまだ変わろうとする機運が高まっていない。最近では、マスコミ報道の影響もあり、教員の大変さが流布され、教育界でも改革の必要性が徐々に共有されるようになってきた。

次に、学校として変わる必要性を感じていない。国レベルでは働き方改革の必要性が提起されても、職場レベルではまだまだ当事者意識が醸成されていない。この場合は、トップリーダーたる管理職のアンテナの感度が重要となる。

また、個人として、変わる必要性を感じていない。世間で働き方改革の必要性が叫ばれていても自分自身に落とし込んでとらえた場合、特段問題を感じていない。あまりの多忙感から、自分の働き方を見直すことや立ち止まって物事の本質を考える時間的、精神的ゆとりがないというのが実情ではなかろうか。

人は、法律やルールだけでは動かないし、動かさない。人は、言葉に突き動かされる。その言葉に意味をもたせなければならない。人間も生き物である。組織文化として定着したライフスタイルを変えることは、腰が重い、気が引ける、尻込みすることも事実である。

改革がむずかしい理由として、次のことが考えられる。余計な仕事が増える。面倒くさそう。今のやり方が正しいと思っている。特に困っていない。自分のやり方に自信がある。自分たちの業界は、他とは違い特殊だと思っている。改革した後の組織の姿、自分自身の姿などがイメージできない。やれる気がしない。それは、過去の失敗体験、スキル不足、情報不足、組織への不信などからくる。

勤務時間の縮減、配布物のデジタル化、留守番電話の導入、勤怠システムの導入、部活動時間の短縮化、ノー部活動デーの設定など、学校にも少しずつ具体的な動きが出てきた。今までの教員は、何でも屋さんだった。授業をやって、担任をやって、部活動をやって、生徒指導をやって、学校の仕事をやって、対外的な仕事もやってと、まるでスーパーマンである。

今までは、生徒に関わるほとんどすべてのことを教員がやっているおかげで、いい面もあった。これからはそんなことは言ってもらえない。生徒のために、本当に必要なことは何か。教員でなければできないことは何か。そういった視点で考えていかないと、改革は進まない。教員でなくてもできることを、いつまでも教員がやっていたのでは、学校は変わらない。そろそろ、次年度のことを考え始める時期となった。これからは、変わることができる学校を目指したい。